

氏名(本籍)	たむら なお こ 田村直子(沖縄県)
学位の種類	博士(言語学)
学位記番号	博甲第2480号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	複合文末形式の意味と用法
主査	筑波大学教授 P h . D . カイザー・シュテファン
副査	筑波大学教授 高田 誠
副査	筑波大学助教授 砂川 有理子
副査	筑波大学助教授 P h . D . 竹沢 幸一
副査	筑波大学助教授 矢澤 真人

## 論文の内容の要旨

本研究は、複合文末形式、ナケレバナラナイ、テハイケナイ、テモイイ、バイイ、タライイ、ザルラエナイ、ズニイラレナイ、カモシレナイ、ニチガイナイの意味と用法とを分析したものである。これらの形式について、著者は、例えば、ナケレバナラナイがナケレバという条件部とナラナイという帰結部の組合わさった複合体として捉えられる一方、ナケレバにもナラナイにも認められない一体化した一つの形式としての新たな特徴を獲得しているとし、これらの形式が、語構成上複合的な内部構造を持つと同時に、一体化した形式としての側面を併せ持っていることを主張している。本研究は、この複合性と一体性とがどのように関わり合ってこれらの形式の意味用法を作り上げているかを論じたものである。

まずはじめに、第2章において、複合文末形式の複合性に起因する特徴(意味)を分析している。はじめに、複合文末形式間関係を論じている。すなわち、テハイケナイの否定がテモイイになる、つまり、「テハイケナイ+否定=テモイイ」というような現象が成り立つのは、「否定+否定=肯定」という論理に基づくと考え、テハイケナイとテモイイを「テハ+イケナイ」あるいは「テモ+イイ」と複合的に捉えているとしている。このような関係は、論理概念を用いて整理できるとし、様相論理的手法を用いて、複合文末形式間には外部否定関係(矛盾関係)や内部否定関係(反対関係)などとよばれる関係が成立していることを論証しながら、これらの関係が、必然性・可能性という様相概念を用いて表すこと画できるとしている。つづいて、各複合文末形式の意味とその構成要素の意味とがどのように関連しているかについての分析が論じられている。例として、テモイイを取り上げ、先行の研究を引きながらテモイイとモを比較している。テモイイは(1)のように「並列した二つの事態とともに純粋な肯定評価を与える」場合と、(2)のように「肯定評価というより、容認可能といった消極的な認め方」を表す場合とがあるとし、これはモが(3)のように、取り立てた要素「児童」と同様にそれ以外の要素「幼児」を肯定する場合と、(4)のように、取り立てた要素「田中さん」を、意外ではあるが可能な要素とし是認する場合とに平行していると捉え、

- (1) 餃子は焼いてもいいし、揚げてもいい。
- (2) この自転車はもうボロボロだから、盗まれてもいい。
- (3) 幼児も児童も参加させましょう。

(4) いつもは来ない田中さんも、今日は早々とやって来た。(同上)

テモイイはモの意味と共通する意味特徴を持っており、それは、当該選択肢を、一つの「可能性」として取り立てるといふようにまとめられると結論づけている。このような分析を基にして、モを含むテモイイ、ナクテモイイ、カモシレナイは〈可能性〉という意味特徴を持ち、ザルヲエナイ、ズニイラレナイ、ナケレバナラナイ、テハイケナイ、バイイ、ニチガイナイは〈必然性〉という意味特徴を持つとという結論を提出している。

つぎに、第3章において、これらの形式の一体性に起因する特徴を分析している。まず、これら複合文末形式をモダリティ形式とみる先行研究を取り上げ、このような指摘の論拠がどの程度複合文末形式に認められるかを検討しながら、これらの形式がモダリティ形式なのかどうかを詳しく分析している。すなわち、モダリティを発話者の発話瞬間時の心的態度とすると、どの複合文末形式も「～かもしれなかった」のように発話時以外に言及でき、また、「～カモシレナイソウダ」にみるように伝聞表現中に出現できることから、「発話時の」と「発話者の」という要素は組み込まれてはいないとし、必然性判定あるいは可能性判定という「心的態度」要素のみが組み込まれているということを論証している。つづいて、「どうか」、「ぜひとも」、「ひょっとしたら」などの叙法副詞と共起し、複合文末形式が依頼や推測などの言語行為を遂行しているとされている例を言語行為論の観点から分析し、複合文末形式は単独で各言語行為を遂行する資格を持っているわけではなく、あくまでも当該言語行為が成立するのと同じ使用条件下で用いられる場合のみ、当該言語行為を遂行しているかのように解釈されるだけだということを実証している。すなわち、各複合文末形式を文末に持つ文は「～する/しない必然性」や「～する可能性」を述べているが、これは、「必然性」や「可能性」が命令、依頼、推測というような言語行為に結びつきやすいために当該言語行為を遂行しているかのようにみえるのであって、これらの形式がそのようなモダリティを持つものではないと結論づけている。さらに、複合文末形式がどの程度文の外側を構成する要素らしさを兼ね備えているかを、文の階層構造理論(南1993)の立場から論じている。日本語の文は、客観的な事柄を表す内側の層から話し手の主観的な態度を表す外側の層まで四段階に分けられるが、各段階に所属する言語形式には人称制限、無意志動詞との共起、疑問文との共起などに関してその段階特有の振る舞いが見られるとする先行の議論を受け、ここでは、ザルヲエナイとズニイラレナイには「～たい」、「可能形」、「感情形容詞」など一番内側のA段階に所属する言語形式と、また、ナケレバナラナイやテモイイには「ベキダ」や「ホウガイイ」などB段階に位置付けられる言語形式と、さらには、カモシレナイとニチガイナイには「ヨウダ」や「ダロウ」などB段階またはC段階に位置付けられる言語形式とそれぞれ共通する振る舞いが観察されたとしている。また、いちばん外側のD段階に位置付けられないという考察結果は、文の外側を構成する要素としての特徴を複合文末形式があまり兼ね備えていないということを示唆するとし、複合文末形式が文の意味構造上の各階層に体系的に位置付けられることが明らかになったという主張を展開している。

第4章から第6章までは、一つ一つの形式の用法において複合性と一体性がどのように現れているかについて、詳しい分析結果が示されている。一体性が顕著に認められるのは「ぜひ」や「どうか」と共起し言語行為を遂行しているかのようにみえる用法であり、複合性が最も顕著に現れるのは、個々の複合文末形式の用法にその構成要素の用法が反映される用法であるという結論が導き出され、終章において、各形式の意味特徴、相互の関係等が一覧の形でまとめられている。すなわち、複合文末形式の複合性に基づく特徴と一体性に基づく特徴とは互いに関連がないのではなく、〈必然性〉・〈可能性〉という概念を介して結びついていること、また、〈必然性〉・〈可能性〉は複合性に基づく特徴、すなわち、意味論レベルの言語的特徴を統合する一方、一体性に基づく特徴、すなわち、語用論レベルでの用法を生み出しているという結論にまとめられている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、1単位として認めることが比較的容易な、個々の形態や単語のような形式ではなく、一つの単位と

見なすことが容易ではなく、しかしながら、文法的、意味的には固有の振る舞いを見せる形式の連続体を「複合文末形式」とあえて捉え、その分析に踏み込んだ点が、まず、評価に値する。これまで、その1単位としての一体性の不確かさから様々に論じられてきたものに対し、複合体内部の個々の要素間の関係を論理式を用いて明確に示し、一体性をもった複合体としての意味的振る舞いを、その論理式から導かれる「必然性」「可能性」という対立的な意味特徴をもって示し、全体を統一的な原理で説明することに成功している点は著者のオリジナリティとして高く評価できる。

各形式の一体性判定のためのテストに今ひとつの踏み込みが望まれる点、また、個々で取り上げた各形式以外にも類似したものが見られるが、それらについての言及がやや不足している点等、なお論ずべき点は残されているが、そのことは、本論の価値を低めるものではなく、本研究は、典型的な複合文末形式について、総括的な分析に成功していると判断される。

以上、本研究は、博士（言語学）の学位に十分に相当するものと認められる。

よって、著者は、博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。